

考えています。地域中の子どもたちを視野に入れて壊れかけた地域をつなごうとしているおとながたくさんいます。こういうおとながいる限り子どもの未来はけっして悲観的ではありません。何といつても私たちの老後を支えてくれる子どもたちです。放っておける筈がないではありませんか。

まだ見ぬ21世紀に来る前に言っておきたいことがあります。物の豊かさはもう登りつめました。これからは子どもの足並に合わせてゆっくりいこうではありませんか。20世紀のような急速な進歩は無用です。足元を見つめましょう。それは次代を託す子どもたちとのコミュニケーションです。

❖21世紀への手紙

大人は夢と希望を熱く語ろう

森と海の学校主宰 岡村 精二

小学生の時、日本の未来を想像した絵を描いた。時代は、高度成長の真っ只中、政府は所得倍増を目標とし、誰もが豊かなアメリカの電化生活と自動車社会に憧れた。テレビでは、力道山が大活躍し、強い日本人に誇りを感じた。月光仮面に憧れ、正義の味方になりきって白い頭巾を被り、サングラスをして、近所を走り回った思い出がある。私は、街の真ん中に高層ビルが建ち並び、その周囲をモノレールが走り、そして空には、宇宙船が飛びかっている、そんな絵を描いた記憶がある。クラスの誰もが、「明るい未来」を描いた。未来に対して、暗いイメージを持っている子どもはいなかった。今の子どもたちに「21世紀の未来」というテーマで描かせたら、どんな絵を描くのだろうか。

環境問題や青少年問題が多発し、経済もどん底、日本社会そのものが疲弊し、10年後を夢見て努力するという、勤勉さも失ってしまったような気がする。テレビは低俗

化し、子どもたちの夢を育むような番組は姿を消し、暴力的な番組が増えた。個室文化、パソコンや携帯電話の影響で顔を見て会話できない若者が急速に増えている。フリーターなどその場主義で生きている若者が増えたのも、夢や希望が持てない世の中になってしまったからだろうか。

それでも私たち大人は、これから未来を生きる子どもたちに、明るい夢や希望を語り、そのために努力する義務と責任がある。地球に、どんな危機的な未来があるとしても、人間は英知を結集して、危機を乗り越え解決する能力を持っていることを歴史的事実に基づいて、自信を持って、21世紀を生きる子どもたちに語らなければいけない。

私たちは、単に愛し合い、子どもを生んだのではない。20代逆上れば700万人、30代逆上れば、2億人のご先祖様がいます。私たちは、その命を引き継ぎ、命の大切さを子どもたちに伝えていく責任と義務があるという本能的なものを持って生きている。最近、夢や希望を語る大人が、少なくなった。私が夢や希望を語ると「お前は青い」とよく言われるが、大人が楽しく生きて行かなければ、子どもたちは夢と希望が持てない。終戦直後を書いた写真集を見ると、貧しいが、皆、いい顔をしている。『裕福な生活とは、心の豊かな生活』このことを私たちは、いつの間にか、忘れてしまっ

たような気がする。私は「天国にいちばん近い島」(森村桂・著)という本の中にあつた「夢を夢のままにせず、その実現に向かって、努力することが生きることだ」という言葉に勇気づけられて、中学3年生からの夢だったヨットによる単独太平洋横断に挑戦した。子どもたちには「挑戦」や「冒険」という言葉がよく似合う。21世紀を迎えるにあたって、子どもたちの夢と希望を育てていく責任が、大人である私たちに、あるのではないだろうか。

プラス発想の生き方。さわやかな生き方。21世紀を前に「貴方の役割は何ですか」「貴方の生き甲斐とは何ですか」そのことをもう一度、自分自身に問い掛けられているような気がする。